

2010 Report from **FD Salon** of RUCED

10-1

龍谷大学 FDサロンレポート

2010年度第1回FDサロン

「失敗から学ぶeラーニング」八洲学園大学の事例から

講師：八洲学園大学理事長 和田公人氏

日時：2010年12月3日（金）17:30～19:30

会場：深草学舎紫英館2階第1共同研究室

対象：本学教育職員（特任・非常勤講師含む）・事務職員

司会：李 洙任（経営学部 教授）

主催：大学教育開発センター

共催：2010年度学部FD自己応募研究プロジェクト

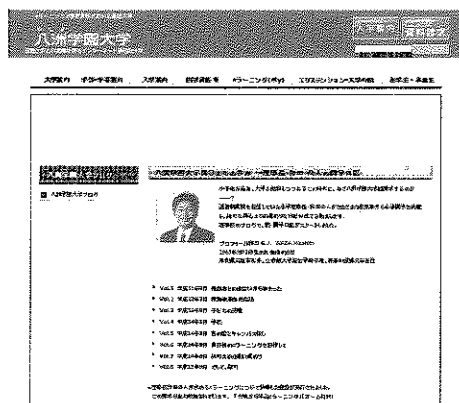
「本学のeラーニングの普及と革新」

研究代表者	李 洙任	（経営学部 教授）
共同研究者	石原 賢樹	（情報メディアセンター）
	井ノ上 智啓	（情報メディアセンター）
	木村 優	（情報メディアセンター）
	辻川 淳一	（情報メディアセンター）
	樋口 三郎	（理工学部 講師）
	森 雅一	（情報メディアセンター）

講師プロフィール：

- 1982年 立命館大学経営学部卒業後、りそな銀行勤務を経て、学校法人八洲学園に奉職。
- 1997年 八洲学園高等学校（通信制）の東京進出を担当。1年目から1000名以上の入学者を集め、業界の注目を集める。
- 2000年 日本初の合宿型通信制高校、八洲学園国際高等学校を沖縄に開校。初代校長に就任。
- 2003年 桜美林大学大学院大学アドミニストレーションコースにて大学経営を学ぶ（修士）。
- 2004年 日本初のeラーニング大学、八洲学園大学を開学。
- 2004年 (株)デジタル・ナレッジ・ユニバーシティラーニングを設立し、取締役に就任。
- 2009年 (株)SOBAエデュケーションを設立し、取締役に就任。
- 2010年 学校運営機構(株)を設立し、取締役に就任。

著書：『失敗から学ぶeラーニング』2004年 オーム社
理事長ブログ「続・開学日記」
[http://blog.study.jp/wada/]



http://www.yashima.ac.jp/tabid/239/default.aspx

「学校に通いたくても通えない人たちのための学校作り」

経営学部 教授 李 洙任

八洲学園大学（通信制）は、2004年に開学した通信制大学で、インターネットを利用しての学位や国家資格の取得を学校の特徴とされています。これまで省みられることがなかった重要なテーマ「家庭教育」に正面から取り組み、eラーニングという手法で、大学という教育機関を「18歳の学び舎」から「すべての人のための生涯学習の場」へと変革する試みに取り組んでおられます。八洲学園の詳細は、公式サイトをご参照ください。

[http://www.yashima.ac.jp]

- ・八洲学園高等学校（単位制・通信制）

- ・八洲学園大学国際高等学校（単位制・通信制）
- ・八洲学園高等専修学校（高等課程）
- ・西日本柔道整復専門学校
- ・八洲学園大学（通信制）

私たちは、学校を作るというのは大変なことのように考えがちです。和田先生は新しい学校や教育システムを作る人で有名で、公立の学校にできないユニークな学校運営を通じて、新しい教育制度を提案し続けています。例えば通信制高校では単位制を取り



入れることで、「経済的な理由で高校へ進学できない方の進路」から、「高校中退の方のための新しい進路」として再構築し、新しい学校作りに取り組みました。また、LD（学習障害）の方のための学校を開校したり、授業料が高いので進学をあきらめた人たちのために、低額の授業料で資格が取得できる専門学校を設立されました。最近では現役東大生を家庭教師としてeラーニングで全国に派遣する学校を始められました。このように先進的な取り組みをされてきた和田先生は教育のIT化の現状を以下のように説明されています。

「昔から学校のIT化は遅れていると言われてきましたが、その状況は今も変わっていないようです。その原因の1つに、教育を人間に代わってコンピュータが行うことへの懸念があるのでしょう。私も、今の技術ではコンピュータが教師に取って代わるとは思えません。しかし、学校にITが役立つ場面は教育だけではありません。それに関わらず、教育論に巻き込まれて学校のIT化が停滞しているのは、不幸なことです。事務職だけでなく、教師の仕事にもIT化により合理化できる仕事はいくらでもあります。合理化で得られた時間を子どもと向き合う時間に振り向けることができるのであれば、IT化をためらう理由はないはずです。学校のIT化を議論する場合は、教育なのか事務処理なのかを明確に区分することが必要です（理事長コラムから 2011/01/26 Vol.20 「学校のIT化」）」

そして和田先生は、教育のIT化の支障になる要因として以下を挙げられました。

■管理面

- ①お金がかかる
- ②コンテンツを作るのが大変
- ③必要なコンテンツがない
- ④専門の管理者が必要
- ⑤システムがばらばら
- ⑥標準化されていないので、別のシステムでデータが使えない
- ⑦顧客管理ができていない

■コミュニケーション

- ①やる気がないと続かない

- ②一緒にする仲間がいない、友達ができない
- ③各コミュニティが分断されている
- ④人間関係が希薄
- ⑤本人確認ができない
- ⑥相手の顔が見えないので不安
- ⑦個人という点と点を結ぶコミュニケーションしかない
- ⑧ナレッジが蓄積されない

教育をIT化する代表的な手段の1つにeラーニングがあります。eラーニングは、企業や学校などの効率性と教育効果を向上させる重要な教育手法として教育現場で発展しつつありますが、米国や英国と比較しても、日本のeラーニングの広がりは遅いと報告されています。eラーニングの普及を阻害する要因として、①サポート職員不足と②教員、学生へのインセンティブ不足などが既に指摘されています（独立行政法人メディア教育開発センター NIME (National Institute of Multimedia Education) 『諸外国におけるICT活用教育に関する調査研究報告書-質の向上、コンテンツ共有、学習スタイルの視点から- (2006年度版)』を参照)。龍谷大学の場合、それらの要因に加え、③学生、教員、職員、関係組織との情報共有ができていない、④広報戦略が弱い、⑤個々の教員の努力が全体の推進力につながらない、などの阻害要因が私たちの研究で指摘されました。「一緒にする仲間がいない」、「各コミュニティが分断されている」、「人間関係が希薄」というeラーニングの阻害要因は龍谷大学にも当てはまります。教員個人の努力が「点」として存在しますが、それが「線」となって「面」に発展できない状況があります。教員が他の教員に「面白そうなことやっているね。やり方を教えてよ。」と気軽に情報交換できる教育環境が重要です。和田先生のお話を聞いて、「学校」の役割、そして「教員」、「学生」の役割が再考されなくてはいけないと感じました。和田先生の講演記録の要約を以下にまとめました。

■ポイント1 「60単位まではeラーニングで単位を取得しても良い」一大学の設置基準から一

eラーニングは通信教育だけでなく、通学制の学校でも利用されています。大学設置基準では、掲示板等による双方向性の確保を条件として、卒業に必要な124単位の中で最大60単位はeラーニングを使っても良いことになっています。

また通信制大学の場合、94単位はレポート添削、残り30単位は授業形式（スクーリング）とされています。しかしスクーリングの30単位分でもインターネットを利活用した教育は認められているので、通信制大学では、124単位すべてをネット上で行うことも可能です。キャンパスがある通信制大学なら、キャンパスの中で授業を行い、それをそのままインターネットでライブ配信することもできます。そうすると学生は、校舎の教室で授業を受けることも、自宅のパソコンで授業映像を視聴することもできます。本学（八洲学園大学）は横浜駅から一駅という立地の良い場所にキャンパスを構えましたが、学生はほとんど来ません。ネットで受けられるなら、ネットのほうが良いと言うのが実情です。

ネットを使った通信制の教育という形態をとれば、入学から卒業まで、一度も登校せずに卒業することができます。そのため海

外在住の方からのニーズも多く、既に海外の方が数十名在学されています。

ここでそもそも通信制の教育をはじめることになったきっかけにふれますが、以前通信制高校で不登校になった子供を預かっていました。不登校の原因を探っていると、子供に原因があるのではなく、親に原因がある場合が多く、親が学べる場所を提供しようと考えたのがきっかけです。ゆえに、学生対象は18歳以上と言うよりは社会人が対象です。社会人が通うという前提に立てば、eラーニングや通信制学校が最適と考えました。

しかし子供をもつ社会人は、子供の為には高額な学費をかける心積もりがありますが、自分の為に高額な学費はかけたがりません。調査をすると、「自分の為の学費にはどれだけかけられるか？」と聞くと月5000円という結果がでました。さすがに月5000円では大学は維持できないので、月5000円で学べることを目標に如何にコストを下げられるかという点に目標を置きました。経費が割れるところはITをフルに使って削るしかない。そうすると、教育の方もITを使ったeラーニングにならざるを得ない。個々のケースを調査しようとアメリカなどの他国に視察に行きました。

eラーニングのシステム自体はそんなに高価なものではありません。しかし、eラーニングに載せるコンテンツ(授業)を作るのに、意外とお金がかかります。授業を録画し、いつでも見られるとなると簡単なようですが、授業を録画しただけでは失敗します。理由は「面白くない」からです。野球でも録画では面白くないでしょう。生中継だから見るのです。録画でも面白いのは、映画など、お金のかかったコンテンツでしょう。ニューヨーク大学だと、1科目1年分の授業(45時間)に2000万円以上をかけることで学生満足度が上がり、学生が増えだしたそうです。自分たちは、さすがに1科目の収録に2000万円かけることはありえない。アメリカの場合、授業が英語なので、他国にも使え、1科目2000万円の投資もありえます。

八洲学園大学は何万人も受講生を集める学校ではないので、そんな多額の投資はできない。では、「どうやってお金をかけずに面白いコンテンツを作るか？」と考え、野球の生中継と同じで、授業の生中継をすれば良いと言う事になりました。幸いにも開学時だったので、先生はこちらで選べます。授業のための人件費は通信制も通学制も変わりません。面白い授業をする先生を集め、後は、どの様に面白さを殺さずに学生に届けるかという工夫ですが、先生と学生が同じ時間を共有するライブ配信を採用することで、面白いコンテンツが低コストでできます。ライブ配信のeラーニングシステムが当時(6年前)はなかったのが、自前で作る事になりました。しかし、コンサート、国会などの、インターネット生中継はあったので、その様なシステム作りは簡単だろうと思っていました。ところが、どうしても映像や音声が遅延してしまう。現在(2010年)でも、Ustream(無料動画配信サービス)を使っていますが、どうしても、3分ほど遅延する。がんばっても1分は遅延する。1分と言う時間は、コンサートや国会では困らないレベルでも、授業の場合は双方向性(インタラクティブ性)が確保できない。

先生の呼びかけが学生に届くまでのタイムラグとして、1分は許容できるレベルではありません。この難題にどの様に対応した

かと言うと先生の動いている顔を見たい学生はいないだろうということで、動画のコマ数を落とし、そのぶん音声の質を重視しました。NHKのラジオ講座の様に、教育は音声だけで可能なのです。それで遅延を縮めることができました。今でも15秒ほど遅延していますが、それは慣れで対応しています。

ライブで授業を配信するメリットとして、時間を共有する臨場感、親近感が強まります。これは結構大事です。授業のビデオだと早送りをしたくなることがあります。124単位すべてをeラーニングで行うとなれば、好きでない科目も学生は履習しなくてはならない。録画だと早送りされてしまう。早送りされれば、教育効果も落ちるでしょう。ライブならリアルタイムで他の学生が見え、チャットで友人ができれば、サボりにくくなります。先生が、その場にいる学生に質問をすることもあり、それによって緊張感も高まります。録画ではそのようなことはできません。また、校舎の教室での授業をライブ配信するので先生方は普通に授業を行っていただくだけです。

■ポイント2 授業は使い捨てでは「もったいない」

eラーニングの導入時に一番問題だったのは教員からの抵抗です。つまりパソコン操作も含め、教員自身のITスキルが低い場合です。でも、パソコンスキルをお持ちでなくても、eラーニングはできるのです。キーボードではなくペンタブレットにすれば先生は全部手書きでよいことになっています。手書きのほうが、学生には評判が良いです。ライブ配信した授業を録画していますが、これは病欠学生や復習用に公開しています。また、大学の授業は共有財産として、何度も使うべきだと思っています。授業は使い捨てになっています。それではあまりにももったいないです。世界的な流れとしては授業を無料で公開する方向に向っていますが、無料配信にお金をかけて録画すると言うのはやりたくないでしょう。しかし、ライブ配信の動画がデジタルデータとして残っていればそれも解決するし、加工や検索がしやすいです。検索ワードの入力は助手が配置されていますが、それでは人件費がかかるので、自動化する工夫をしてみました。しかし授業を公開すると言う前提にしてしまうと、不特定多数の視聴者(学生)に、先生は言葉を選び、示す事例も無難なものになって、面白くなくなります。

また、プライバシーの問題があり、教室内では気軽に話してくれるが、公開となると、プライバシーの件を考えてしまい、気軽に話してくれなくなったりします。次に著作権の問題があり、その日の新聞を授業で使うとき、ライブ配信なら問題ないが、オンデマンドにして不特定多数が見られるようになると、違法になります。しかし、そう言う部分を使わないでくれとすると、授業が面白くなくなります。

ライブ配信授業とオンデマンド授業と同じで、作りにくい部分は同じなのです。「使える教材に限られている」、「突っ込んだ話ができない」、「オンデマンドだと講義の時間がわからないので、授業内容が古くなったり、間違っている場合もある」この三要素が共通点です。

ライブで工夫したのが「理解度ボタン」です。学生がパソコンの前を離れてしまうことを避けたかった。そのため一定期間操作

しないと講師側がわかる仕組みを入れました。10分間操作をしないと「退席」表示になり、それを防ぐためには何か操作をしてもらうようにしたが、それなら授業内容がわかっているかどうか、理解度のボタンを押してもらうことにしたのです。教師側には全学生の理解状況がグラフとして表示されます。最初はパソコンの前に学生がいるかどうかの判定でしたが、理解度ボタンのおかげで本音が出る様になりました。通常の教室授業では、学生は目を合わせると頷いたりするなどわかったふりをしますが、本当はわかっていない、正確な理解度がわかりづらい。グラフは後で分析ができるので、時間軸にそって理解度を見ながら、授業内容のどこが良かったか悪かったかを分析ができます。現在使われているクリッカーの原型です。理解度ボタンは授業を中断せずに授業内容が理解できたか否かを計るのに良い機能です。

■ポイント3 eラーニングは通信教育か？

通信技術を使う教育ではありますが、今までの「通信教育」の「通信」とは異なります。「eラーニングはコンピュータによる教育か？」という質問がよくなされます。コンピュータ無しではeラーニングは成り立たない、しかし、教育のすべてをコンピュータで行うことが、eラーニングではありません。コンピュータにすべてを任せて効果が上がるのは、単純な知識伝授型の教育が可能な資格試験向けのようなドリル型の学習だけです。その昔行われていたCAI教育。しかし、CAI教育は、安かろう悪かろうで廃れてしまいました。

eラーニングも同じように、コンピュータによる教育という道をたどると、CAIの様に、一時的なブームで終わってしまうと思います。ただ、CAIとeラーニングの違いは、インターネットと言う通信回線で、離れた場所を結んだことです。しかし、今はそのことを忘れて、CAIの間違いを繰り返そうとしています。WBTもあり、こちらはインターネットに接続されていますが、CAIの域を出ていません。

CAIやWBT、CBTは、コンピュータのエンジニアが、「コンピュータでもこれだけのことができる」、と言う腕自慢の方法として開発されたもので、教育現場のニーズに応える形、現場の先生が困っていることを解決するためや、生徒・先生の要望から登場したものではないのです。

「eラーニングとは何か？」という問いへのはっきりとした答えは存在していないので、ここでは「インターネットを活用した新しい教育手法」と定義したいと思います。eラーニングは企業から利用が始まりました。その理由は、学校や家庭での教育が知識や技能伝達以外の要素もあるのに対し、企業内教育では、業務知識の獲得が主な目的になるので、機能のシンプルなeラーニングでも学習効果があったからです。

しかし、eラーニングは従来の教育すべてを包括するものではありません。それは従来の教育に取って代わるものでもなければ、補完するものでもない。新しい教育手段である。それを理解せずに導入すると、失敗します。

■ポイント4 eラーニングの課題

eラーニングの課題には以下の要素があります。

(1) コストについて

一般には、コストカットのメリットが考えられていますが、実はコンテンツ制作にかなりの費用と労力がかかります。このすり合わせも必要な要素だと考えます。

(2) コミュニケーションについて

メリットの裏返しで、学習者は孤立している事になります。学習者同士でコミュニケーションがあれば、学習者の孤独感が癒されます。

(3) 学生の理解について

eラーニングは、文字情報がほとんどなので、学生の理解度を測ることが難しいです。理解度を確認するために小テストばかり行っても本末転倒になりますが、学生は自分だけわからなければ恥ずかしいなどの処世術で返答しがちです。そこで、匿名性を維持しながらも理解度を図る工夫が必要です。

(4) 使い勝手

キーボード入力から、パソコンの画面を見て、目が疲れるという健康上の問題から、プライバシーの保護やパソコンの有無で学習の可否が決まると言うデジタルデバイド関連まで、パソコンがeラーニングの道具だからこそ考えられる問題があります。

(5) 環境的な慣れ

eラーニングを活用するにあたって、現実の事象を仮想に置き換えることも必要です。学校の校舎や事務室、現実の学校生活を仮想の中にもつくり、その機能を再現することは大事と考えています。

■参加者のコメント

このたび、eラーニングのコンテンツ作成・動画配信に携わった者として、技術的な視点で講演に参加させてもらいましたが、大変興味深く、参考とさせていただく事もあり有意義な時間を過ごす事ができました。大学の規模、受講対象者が違うので一概に龍谷大学に当てはめる事は難しいところがありますが、今後eラーニングを進めて行く方向ならば、参考にしていく部分はあると思います。今回の講演会では、八洲学園大学のeラーニングシステムは、教員・学生の両方の心理面を含めて、しっかりと分析してシステムを構築されていると感じました。コンテンツを作ったら作りっ放しではなく、『理解度ボタン』という機能を有効活用し、後で教員にフィードバックして授業を分析できるように工夫されています。まさにeラーニングから、FDに繋げるという仕組みが出来上がっています。龍谷大学の現状は、Moodle利用者はある程度多いですが、オンデマンド授業（事後学習型）は、運用（人的、技術）コスト等の問題があります。eラーニングを本格的に進めて行くには、再度自学の状況を分析・研究し、実運用に向けては、専門部隊を整えて行く必要があると思います。

FDサロンレポート 10-1

発行日:2011年3月

発行:龍谷大学 大学教育開発センター

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

TEL. 075-645-2163 FAX. 075-645-2190

<http://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd/index.html>